愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 12 号
2011.5
1-8p.

縄文時代後期注口土器の残存状況に基づく分析

―豊田市今朝平遺跡出土資料より―

川添和暁

縄文時代後期の注口土器について、使用･廃棄の痕跡から、その活動行為の復元を論じたものである。今回、部位と残存状況について特に注目して、分析を行った。注口土器自体の分析はもちろんのこと、加えて、注口土器とは歴史的脈略が全くなく、かつ形態的に類似する、中世陶器古瀬戸類の水注との比較・検討を行った。その結果、両者には、残存部位および欠損状況において大きな相違が認められ、注口土器では、注口部を意図的に根元から切断する行為がしばしば行なわれたものと推定した。遺跡から出土する注口土器は、注口部、注口部が除去された胴部、注口部のついたママの完品、胴部片の４群の状態に分けることができ、特に他の破片とは接合しない注口部の存在など、祭祀行為や遺跡間関係を考える上で重要になることを指摘した。

はじめに

本稿の目的は、縄文時代後期の注口土器に関する使用・廃棄の痕跡から、人為的行為について論じるものである。土製である資料では、破断面の観察に限界があり、別の視点からの検討が必要と、筆者は考えた。

今回、資料の分析の方法として、歴史的脈略がなく、かつ形態的に類似する資料を比較・検討する方法を採用した。考古資料が当時の道具として使用されていた場面では、その意義などにより、使用法がある幅で一定しているならば、異なる二者（あるいはそれ以上）を比較した場合、使用痕や欠損状況などで、パターンの差が指摘できるのでないのか、という仮定からである。さらに、もしこの仮定に蓋然性が認められるとなれば、ここから新たな人為的行為の復元を行なうことができる道が開けると、筆者は考えているのである。

研究小史

注口土器の名称および地理的な分布の提示など、現在の注口土器研究の基礎には中谷治宇二郎の記念碑的な論考がある（中谷 1926、1928）。それ以降、戦後から高度経済成長による大規模開発に伴う資料的増加を背景として、編年的研究、系統的研究、遺跡における出土偏差など、研究が精緻さを増した状況が、先学により多くまとめられている（我孫子 2008、鈴木 1997 など）。ここでは、注口土器の欠損および残存状況などについて述べた研究を中心に概観する。

藤村東男は、東北地域晩期、青森県是川遺跡の注口土器について、注口部着脱率という統計的結果を提示した。注口部には口縁が肩部に直接連なる A 型と、口縁が外反し二段にくびれた頸部を経て肩部に続く B 型があるとして、それぞれ胴部への接合方法が異なるものの、注口部の形態および注口土器自体の形態に関わらず、注口部着脱率は 25% 前後でほぼ一定しているとした（藤村 1972：198 頁）。

1990 年代末になって、この視点の言及に鈴木克彦の研究がある。鈴木は注口土器について総合的な研究を行っており、特に「注口土器の用途」で研究姿勢などについて述べた（鈴木 1999）。鈴木は、注口土器の製作目的・使用目的・廃棄目的など考古学的検討を行なうためにも、発掘調査時の出土状況にも注目すべきと、実証的な研究の必要性を論じた。遺物自体の観察では、底部の擦れ痕や、剥離した注口部の補修の仕方のほか、製作上の弱点ではない部分の損壊など意図的な破壊をしているような事例の存在を指摘した（同：57 頁）。用途としては墓に関わる出土が多いことから、慶弔時の儀礼に使うことを念頭に作られた器だとした。

西田泰民は西日本域の注口土器について、東

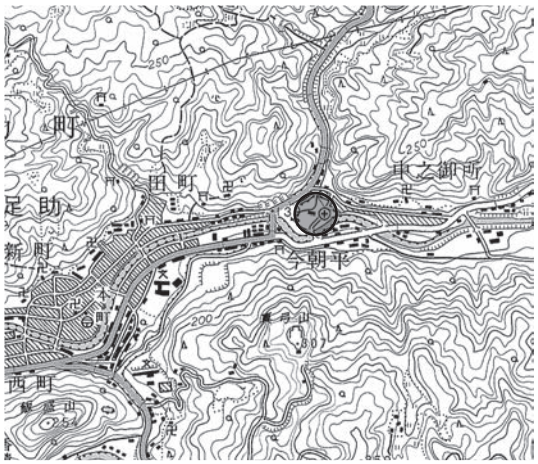
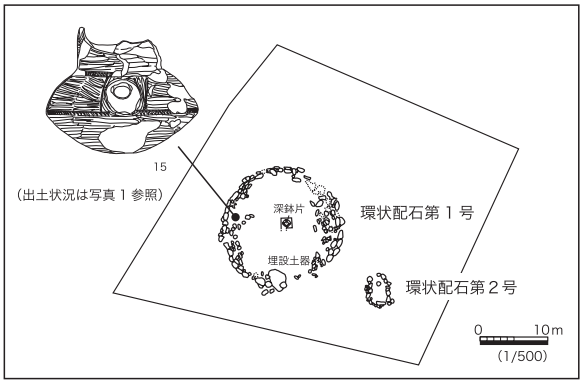


図１　今朝平遺跡の位置
（国土地理院刊行２万５千分の一地形図「足助」より）



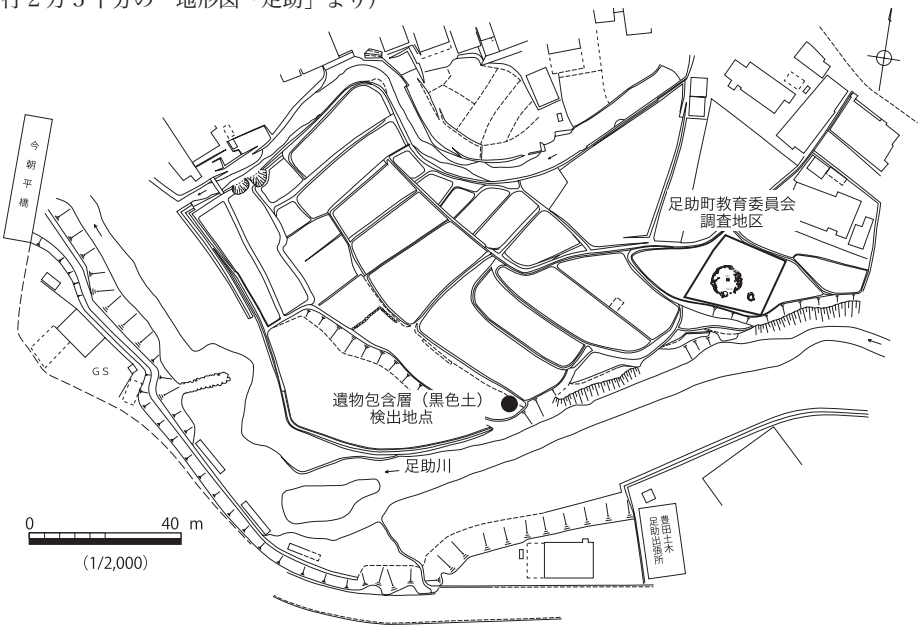


図２　今朝平遺跡調査地区・遺構配置図

日本域からの流入による西日本域での様相という視点から述べた。その中で、関東以北においては、加曽利Ｂ式期以降、注口部分下に突起物が付き男性器と見立てたことを具体的に認められるもので、東日本では注口部が特別視されたことを簡潔に述べている（西田 2010：226 頁）。これまで遺跡出土の注口土器の数量を論じる際にも、どの部位なのか、あるいは完形なのかなどの議論はあまり見られないようである。注口部の特別視という言葉による西田の記述は、遺跡からの出土様相を端的に示す言葉として重要である。

祭祀や葬送儀礼などに用いられることが想定されている注口土器であるが、注口土器に対するヒトの行為の復元という点において、まだ解明すべき問題が多いといえる。

今朝平遺跡について

今朝平遺跡は、豊田市足助町久井戸に在り、足助川と久井戸川が合流する地点に形成された舌状の河岸段丘上に立地して、標高は約 140m である（図 1）。報告によると（天野・鈴木茂・鈴木昭 1979）、もともと水田であったが愛知県足助保健所の建設予定地となったため、昭和 53・54 年（1978・79）造成による削ぎ取り工事部分（約 450 ㎡）を対象にして、足助町教育委員会による発掘調査が行われた（図 2）。

調査では、環状配石と報告された礫を配した遺構が２基検出され、いずれも縄文後期加曽利BII式期としている。出土遺物は、土器（後期中葉～晩期）・土製品（土偶・動物形土製品・耳飾り）・石器（石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・石錘・凹石・石皿）・石製品（石棒石剣類・大型石棒・玉類）が出土したとある。また、樫王式期の土器棺墓も２基検出された。

出土土器の総体については、正式な報告書が出ていないため、確実なことを述べることはできない。しかし、概報によると、後期中葉の八王子式～西北出式を中心として、晩期前半の半截竹管文系条痕土器や突帯文土器・条痕文土器の出土がある。このうち注口土器は八王子式～西北出式、およびこれに併行する時期を中心とした、縄文時代後期中葉に概ね属するものと考えられる。

注口土器の分析

今回、今朝平遺跡出土注口土器のうち、注口部およびその付近の破片について、欠損状況を検討した。検討資料は94点で、調査で出土した注口部のすべてである。注口部とその付近について部位を記号化して、その範囲を示す形で残存範囲を示す方法をとった。主な欠損傾向を示すものを図３・４に、分類を図５に、統計的結果を表１に示す。

まず、残存部分について、注口部のみの資料が67点（71.27%）、胴部へ続く資料が26点（27.65%）と、注口部のみの資料が圧倒的に多い。その中でも最も多いのが、注口部全体が残存しているP-Cであり、39点、全体の41.49%を占める（図３・４の５・６・９・11・12・14など）。統計的には胴部へと続く資料に入れているP-Dにも胴部片の残存が極めて極若干のものがある。この中の一部も、図３・４の２・３・13のように実質的にはP-Cと同質であったとすれば、P-Cの比率はさらに高くなると考えられる。また、Cの部分の欠損には、注口部下端に貼付けられている凸部分も付着しているものも複数確認することができ（同図の5・10）、破損は、貼付けと根元部分で生じる頻度も高かったものと考えられる。このC部分の欠損に対応する胴部側の状況を示しているものが図４の15である。この資料は、注口部のほか口縁部側にも欠失が認められるがこれは後世の欠損と考えられ、注口部以外のほぼ完形資料といえる。特に、注口部周囲の胴部側には欠損がなく注口部のみ削ぎ落ちたような欠失状況が特徴といえ、対応する注口側としては、型式・文様は不問として欠損状況のみからいえば、図３の11・12などの状態のものと推定できる。

図３の７はP-B、図４の16・17はB-Qとしたものである。これらは今回の資料の中では極めて資料数が少ないものとなっている。

遺跡からの出土状況は、配石遺構とされた遺構上面の遺物包含層からの出土であり、現状ででは、出土遺物の集中などを検討する方法は見当たらない。しかし、図４の15は正位で出土しており、遺跡内に置かれた状態を示すものとして注目できる（写真１）。

なお、注口部の胴部側欠損の要因は、破断面の状況からでは分からない。素材が土製であり、破壊などの力学的効果などの検討を確実に行うことができない。このため、本稿では、形態が類似する、他資料の比較・検討を試みる次第である。

対比資料の提示

歴史的脈略の関係が認められず、かつ形態的に類似している資料に、中世古瀬戸窯で生産された水注がある。本稿では、瀬戸市塚原１号窯跡出土資料を用いて、水注の分析を行いたい。

塚原１号窯跡は、瀬戸市若宮町１丁目に所在する、中世の窯跡である。平成18年（2006）にわたって、愛知県埋蔵文化財センターによって窯跡全体の調査が行われた。調査面積は970㎡で、窯体２基・作業施設などの遺構群・灰原などが調査された。本窯の製品としては、無釉陶器の山茶碗類と施釉陶器の古瀬戸類があり、山茶碗類は第７型式、古瀬戸類は古瀬戸前期第III～IV段階に属するのと考えられる。ここでは、古瀬戸類のうち、水注と呼ばれる、注口部のついた器種を検討対象とした。これらの資料

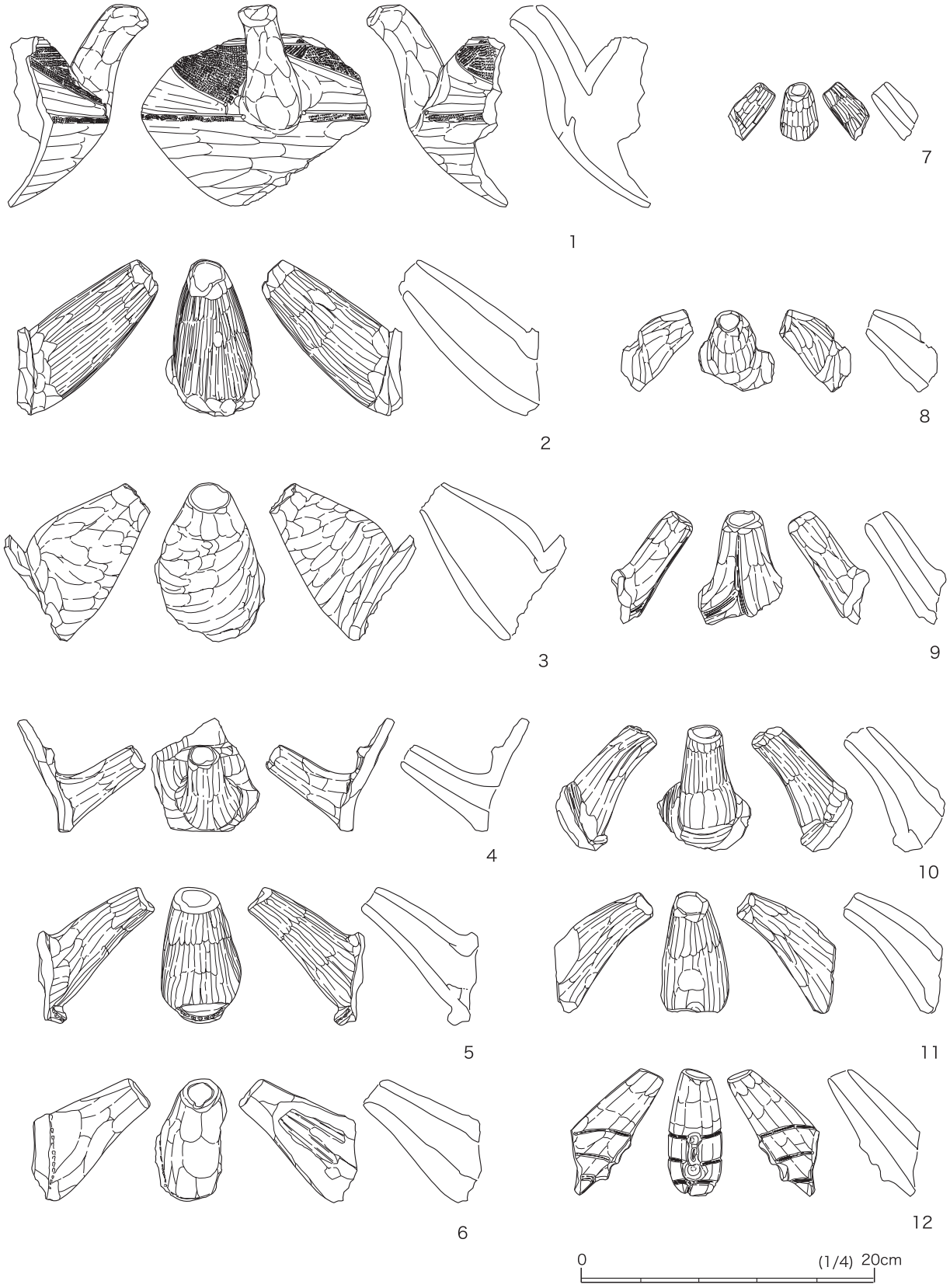


図３　今朝平遺跡出土注口土器１

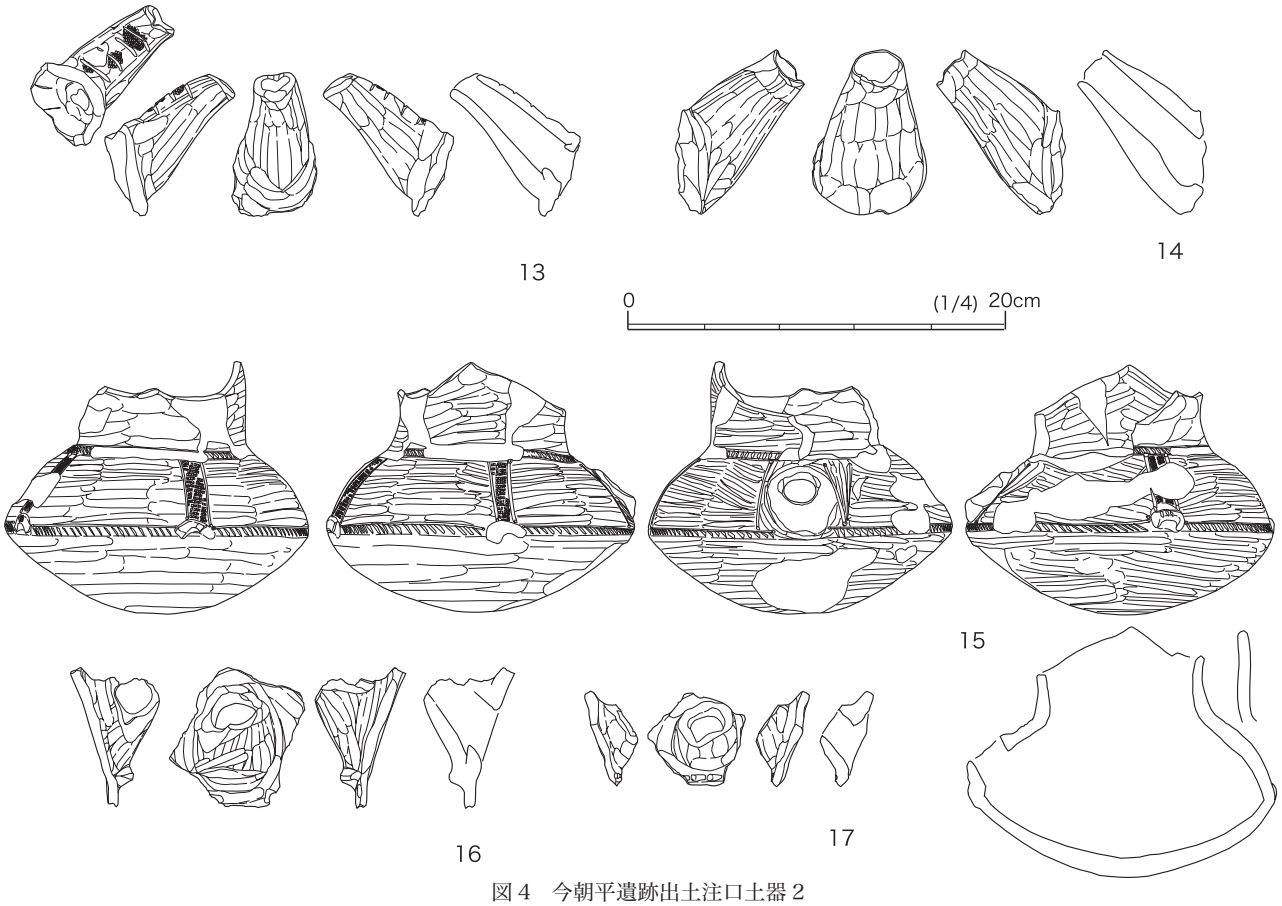


図４　今朝平遺跡出土注口土器２

表１　今朝平遺跡注口土器注口部付近欠損傾向一覧

注口部残存状況		点数	全体比率（%）	
全周	P-D	16	26[27.65%]	17.02
全周	P-Q	1		1.06
全周	B-Q	2		2.13
全周	C-Q	1		1.06
全周	D-Q	1		1.06
全周	C-D	2		2.13
半欠	C-D	3		3.19
全周	P-A	0	67[71.27%]	0.00
全周	P-B	1		1.06
全周	P-C	39		41.49
全周	A-B	2		2.13
全周	B-C	3		3.19
全周	A-C	3		3.19
半欠	B-C	15		15.96
半欠	P-C	1		1.06
半欠	A-C	3		3.19
X		1		1.06
計		94		99.98

注口土器注口部欠損点名称

A：注口部先端部下
B：注口部中ほど
C：注口部根元
D：注口部＋ごく若干の胴部
P：先端部分
Q：胴部側
X：分類不能

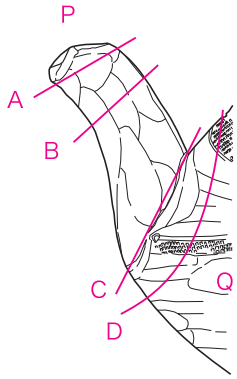


図５　今朝平遺跡出土注口土器欠損傾向分類図

写真１　注口土器出土状況（天野・鈴木ほか 1979 より引用）

写真２　今朝平遺跡出土注口土器

は、作業場としての整地面や土坑内、斜面に廃棄された灰原からの出土である。

調査では水注は総計 447 点出土した（図 7）。これを上述した注口土器同様に、注口部とその付近についての部位を記号化して (図 6)、その範囲を示す形で残存状況を表現した（表２）。第１に注目できる点としては、注口部側のみの残存資料が 94 点（21.03%）に対して、胴部側まで含めた残存を示す資料が 335 点（74.94%）と、圧倒的に後者が多い点である。今朝平遺跡出土注口土器の事例とはいわば全くの正反対の状況を示しているといえる *。第２に、主に胴部側につながる資料を観察すると、図５の 21 ～ 24 のように注口部の根元部分の盛り上がりが残存している資料（C1-Q・C2-Q）が 214 点（47、87%）と、全資料の半数を占めるまでに存在していることである。これも今朝平出土注口土器には認められない傾向であり、大きな相違点として取り上げることができる。

水注の欠損要因としては、１. 窯焼成段階のひずみなどによるもの、２. 窯焼成後の廃棄・二次的移動などによるものとに分けられる。この両者を識別するために、破断面上の自然釉の降着の有無を識別し、別個に統計的処理を行なった。表２の記号 U・O がこれを示す。自然釉の降着が認められない O の C1-Q・C2-Q では合わせて 61.29% と、それ以外の欠損状況と比べてより比率が高くなり、この欠損状況がより常態化したものと考えてよいであろう。

若干の考察

上述したように、今朝平遺跡出土注口土器と、塚原一号窯跡出土古瀬戸水注の各注口部欠損状況は、両者に大きな違いが認められる。このことから、注口土器の使用・廃棄に関する考察を行ないたい。

* 本来、生産遺跡では、両者は同数かそれに近い点数であることが想定される。この点数差は、窯業遺跡の遺跡形成過程を検討する上で、留意する点になるかもしれない。

表２　塚原１号窯跡古瀬戸類水注注口部欠損傾向一覧表

注口部残存状況	点数	全体比率（%）		Uのみ点数	同比率（%）	Oのみ点数	同比率（%）
A-Q	24	335[74.94%]	5.37	10	5.18	14	5.65
B-Q	54		12.08	11	5.70	43	17.34
C1-Q	70		15.66	24	12.44	46	18.55
C2-Q	144		32.21	38	19.69	106	42.74
D-Q	9		2.01	4	2.07	5	2.02
P-Q	34		7.61	26	13.47	8	3.23
P.A-B	26	94[21.03%]	5.82	21	10.88	5	2.02
P.A-C1	46		10.29	40	20.73	6	2.42
P.A-C2	6		1.34	5	2.59	1	0.40
P.A-D	5		1.12	4	2.07	1	0.40
P-A	10		2.24	7	3.63	3	1.21
P-D	1		0.22	0	0.00	1	0.40
S	12		2.68	3	1.55	9	3.63
X	6		1.34				
計	447		99.99	193（/447）	100.00	248（/477）	100.01

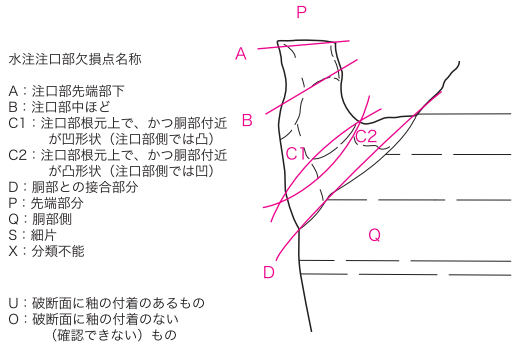


図６　塚原１号窯跡古瀬戸類水注欠損傾向分類図

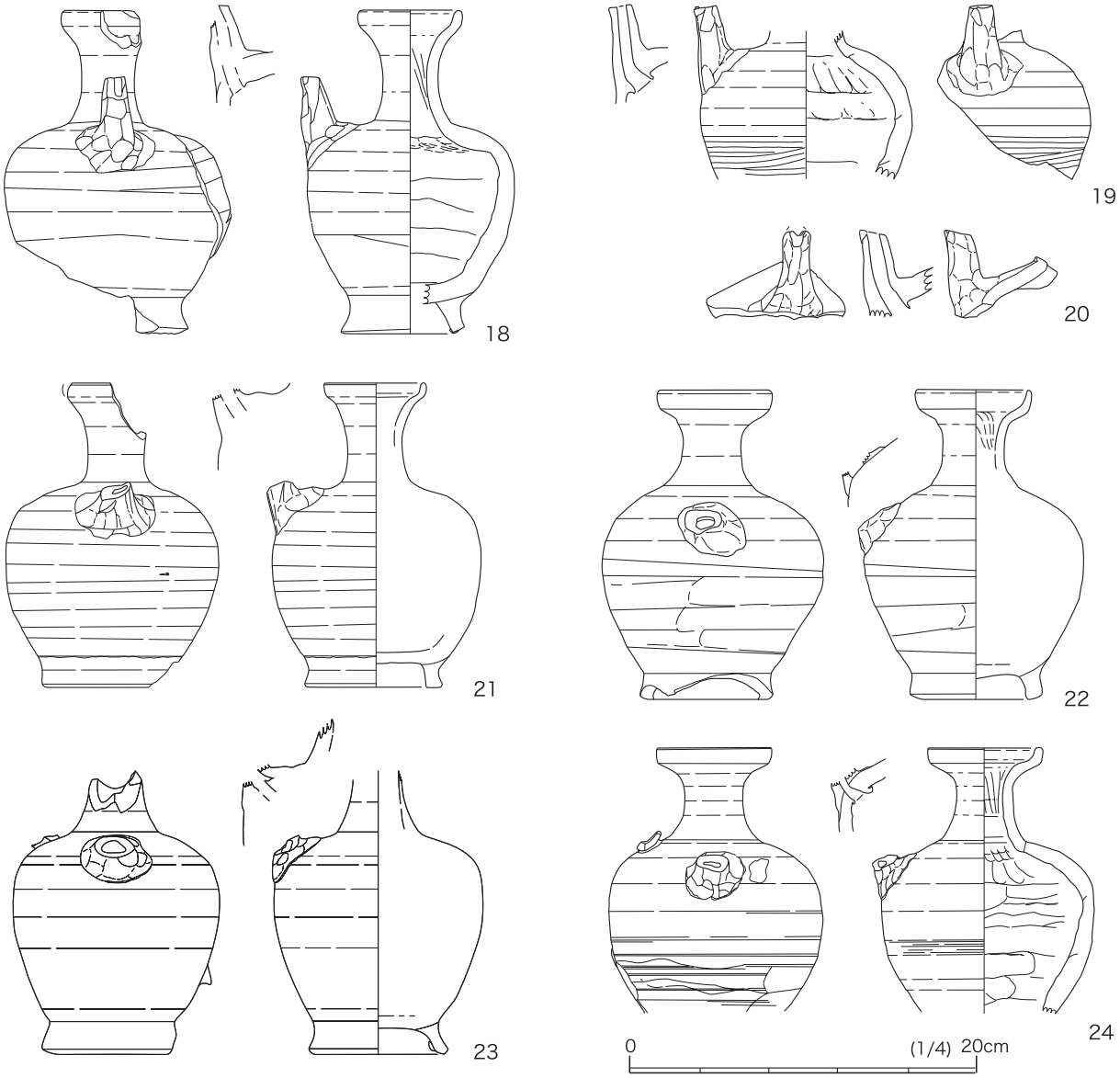


図７　塚原１号窯跡出土古瀬戸類水注

塚原一号窯跡の廃棄は、窯業生産に伴うもので、出土した資料は、当時の製品としては、失敗品など製品として流通しえなかったものである。特に灰原から出土した資料は、斜面廃棄されたものと考えられ、そこには廃棄行為以上の意図は認められないと考えてよいであろう。特に、破断面に自然釉の降着が認められない一群は、このような廃棄行為による欠損状況をよく示しているものと位置づけられる。注口部残存状況 C1-Q・C2-Q がこの状況を反映したものとして良いであろう。

一方、今朝平遺跡出土の注口土器は、1.注口部残存状況において P-C が半数近くを占めること、2.この P-C の中で注口部下に貼付けられている凸部分も注口部に付着した状態が散見されること、に注目したい。また、注口土器に関して言えば注口部先端部の欠失資料が少ないこと（P-A・P-B など）が挙げられる。図3の6は、欠損の力が注口部根元により集中した状況を如実に示しており、偶発的な欠損で生じる頻度はより低いのではないのかと考えるのである。さらに塚原一号窯跡の水注同様に、偶発的な欠損が多いならば、P-A・P-B（図3の7）や B-Q（図4の16・17）を示す事例がより多くなることが想定できる。以上のことから、今朝平遺跡出土注口土器は、注口部根元に向って欠損する力が重点的に掛かった、換言すれば当時のヒトの活動の中で、注口部を根元から切断する行為がしばしば存在したことを裏付けられるといえよう。根元から除去された注口部はそれのみが遺跡内に廃棄（埋納）され、一方で注口部が除去された側の胴部も特殊な遺構内に埋納されたと考えられる。これは、注口土器の持つ祭祀行為の一場面なのかもしれない。従って、注口土器については、祭祀行為によって、注口部、注口部が除去された胴部、注口部のついたママの完品、胴部片の、大きく四群に分類できると考えられる。このうち胴部片を除いた前三者は、当時の祭祀行為の結果としてこの状況で今朝平遺跡では共存している可能性がある。

まとめと今後の課題

今回は、注口土器は今朝平遺跡を古瀬戸水注は塚原一号窯跡という限られた資料からの比較・検討である。両者は歴史的脈略につながりがなく、比較・検討による相違点が、当時のヒトの活動様相の差につながると考えられる。水注は陶器で注口土器は土器であるから、両者の硬度は異なるというのは承知しているものの、注口土器の注口部の方が、水注の注口部に比べ、保存状況が良い、ということは、この素材上の問題をまずは保留にできる事情を満たしているといえる。

今朝平遺跡に関わらず、縄文時代後期の注口土器では、他の土器片は接合しない注口部のみが単独で出土する事例がしばしば認められる（川添編 2009 など多数）。除去された注口部の性格・位置づけは今後の課題であり、祭祀行為の復元はもちろん、遺跡間関係を検討する上での重要な糸口になると考えられよう。

謝辞

本稿を草するにあたり、新修豊田市史編纂室の鈴木昭彦氏には、多大なるご協力とご教示を賜った。ここに感謝の意を表する次第である。

資料の所在

1～17：豊田市教育委員会、18～24：愛知県教育委員会岩瀬彰利編 ,1995『大西貝塚』豊橋市教育委員会。

参考文献

我孫子昭二 ,2008「注口土器」『総覧　縄文土器』1043～1048 頁。東京　株式会社アム・プロモーション。
鈴木克彦 ,1997「注口土器の研究」『研究紀要』2.1～38 頁。青森県埋蔵文化財調査センター。
鈴木克彦 ,1999「注口土器の用途」『日本考古学協会第 65 回総会研究発表要旨』56～60 頁。日本考古学協会。
鈴木克彦 ,2007『注口土器の集成研究』東京 雄山閣。
須原　拓 ,2003「住居址内出土の注口土器―出土状態からみた注口土器の機能・用途について―」『史叢』68.21～44 頁。日本大学史学会。
中谷治宇二郎 ,1926「注口土器の分布に就て」『人類学雑誌』41-5.240～250 頁。東京人類学会。
中谷治宇二郎 ,1928『注口土器ノ分布ト其ノ地理的分布』東京帝国大学理学部人類学教室研究報告 4。
西田泰民 ,2006「注口土器の用途」『考古学ジャーナル』550.6～9 頁。東京　ニューサイエンス社。
西田泰民 ,2010「注口土器」『西日本の縄文土器　後期』京都　真陽社。
藤田東男 ,1971「東北地方における晩期縄文時代の注口土器について」『史学』44-2.53～72 頁。三田史学会。

報告書など

川添和暁 ,2009『大坪西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
天野暢保・鈴木茂夫・鈴木昭彦 ,1979『今朝平遺跡概報』足助町教育委員会。